

# 日本におけるイスラーム50年の歩み

宗教法人 日本ムスリム協会  
会長 樋口美作

仁悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

## 1. 日本の近代化の影で

標題は50年の歩みではありますが、全体的流れも考えて、日本が近代化の道を歩み始めた約100年前に、イスラームがどうであったのか若干触れてみたいと思います。

19世紀の半ば、1868年、明治の新政府によって第一歩を踏み出した日本の近代化は、ご承知のように「和魂洋才」「脱亜入欧」の潮流の中で、欧米先進国の高度な文化や思想を摂取することでありました。多くの若き日本のエリート達が欧米諸国に派遣されましたが、中には新島襄、内村鑑三、新渡戸稲造らのように、後にはキリスト者としての啓蒙思想家が現われ、キリスト教精神は日本社会の隅々まで浸透して行きました。

キリスト教が先進国の宗教として、日本人にハイクラスのイメージを与えたのに対し、イスラームはいわば未開の宗教として問われ、およそイスラーム本来の宗教的本質からかけ離れた、偏見と誤解に満ちたものでありました。このイスラームが背負った重いハンディキャップは、今も日本社会の一部にその影を落としているといえるのであります。

## 2. キリスト教植民地主義と日本帝国主義との狭間で

ところで、欧米先進国の制度や科学技術、文化を摂取した日本は、日本固有の伝統と文化との調和を取りながら、近代化を推進しましたが、20世紀前半になると、富国強兵のスローガンとアジア主義の下に、やがては海外への進出を目指しました。

しかしながらこの日本帝国主義が目に向けた、中国大陸や東南アジア諸国は、すでに欧米キリスト教先進国の植民地であったり属領であったりしました。正に両者の利害が激突する舞台であったのであります。ここで見逃すことのできない重要なことは、その地域には多くのムスリム（イスラーム教徒）が生活していたという事実です。

この時点で日本政府は、当時3億と言われたムスリムやイスラーム諸国との友好関係を構築することこそ、キリスト教植民地主義に対抗する国家的世界戦略であることを知ります。したがって日本国内では、にわかにイスラーム研究が盛んになり、多くの研究機関や団体が設立され、イスラーム関係の書籍が出版されるなど、イスラームは国政の檯舞台に踊り出ました。

1935年には日本で最初の神戸モスクが建設され、引き続き1938年には東京モスクが建設されて、当時、イスラーム活動の中核であったトルコ・タタール人、アブドッラシード・イブラヒームがイマームとなりました。この開堂式にはエジプト、サウディアラビア、イエメン、アフガニスタン各国の、国王代理や、アズハル大学その他多くのイスラーム諸国代表が参列し、日

本国内からは政界、軍部、財界、学界の名士300余名の出席があったのであります。

又この年には、国家機関とも言える「大日本回教協会」が東亜新秩序の建設を旗標に、元内閣総理大臣、陸軍大将の林銑十郎を初代会長として発足、国をあげてのイスラーム・ブームが出現したのであります。意気軒昂たる青年達が海外雄飛の夢を求めて、中国大陸や東南アジア諸国にミッションとして派遣され、現地ムスリムと接触するようになりました。

翌年の1939年には「宗教団体法案」が国会で議決されましたが、これを機に、これまで不明確であったイスラームの地位も、仏教やキリスト教と同じ法的な監督と保護を受けるようになりました。

やがて戦局は日本軍の劣勢に変わり、1945年、日本はついに4年間戦い続けた第二次世界大戦に敗れ、占領軍の管理下で、民主主義の道を歩むことになりました。

それまで精神的支柱であった国家神道が解体され、敗戦のショックに国民は「和魂」も「敬神の心」も失い、宗教そのものが悪であるような精神的な混乱の中に、一時開花したかに見えたイスラームの花も、実を結ぶことはありませんでした。

### 3. 新しいイスラームの胎動と日本ムスリム協会

そのような戦後の社会状況の中で、1952年、戦時中、海外でムスリム達と生活を共にし帰国した47人の日本人ムスリムによって、「イスラーム友の会」が結成され、ムスリム相互の親睦を計りながら、将来的なイスラームの布教活動について話し合われました。これが今日の「日本ムスリム協会」の前身であり、日本における最初のムスリムの団体であります。

アルハムドリッター、戦後の混乱時期にも、戦場で育まれたイスラームの種は枯れることなく新しい芽を出したのであります。

ここに日本におけるイスラームの布教活動は、日本人ムスリムの団体の手によって展開することになり、1959年には初めての協会機関紙「イスラームの声」がファルーク永瀬の献身的な努力（ダアワ活動）によって発行されました。

この頃になると、海外からの布教者グループの来日が始まりました。1956年から1960年にわたって来日した、インドとパキスタンのタブリーグ・ジャマートの布教活動は、注目にあたいするものがあり、一時的に日本のイスラーム活動の中核となりました。なぜならこの活動によって、アブドルカリーム斉藤や、ハーリド木場など、後の日本イスラーム界の指導者が入信し、又オマル三田と技術者でクルアーンのハーフィズ、アブドルラシド・エルシャド師との出会いは、後のクルアーンの日亜対訳のプロジェクトに繋がったからであります。

このように1960年代の「日本ムスリム協会」の活動の主体は、戦時中、中国大陸や東南アジアで、ムスリムとして現地生活を体験したムスリムと、日本でトルコ人やパキスタン人の布教活動で入信したムスリムの両者によって構成されました。

その主な顔触れは、サディーク今泉、オマル三田、アブドルカリーム斉藤、アブーバクル森本、アブドルムニール渡辺、ムハンマド・オマル五百旗頭、オマル林、ムスタファー小村であり

ます。ムハンマド・オマル五百旗頭とオマル林は今も健在で当協会の重鎮として活動に参画されております。他の諸先輩はある時期には、会長として重責を果し、今はサディーク今泉を除き、当協会のイスラーム霊園に眠っております。いずれの方々もムスリムとして人間味豊かな個性的な先輩でありました。

インナーリッターヒ　ワ　インナ　イライヒ　ラージウーン

(げに私たちはもともとアッラーのもの、そして私たちはアッラーの御許に帰り行くものなり)

1968年に当協会も宗教法人として登録され基盤をかためましたが、この時代の機関紙『イスラームの声』を見ると会員は約60名で、協会活動に対しては、世界のイスラーム諸国から、常に暖かい配慮と援助の手がさしのべられていたことが解ります。

中でもサウディアラビアの「世界イスラーム連盟」、エジプトの「イスラーム問題最高評議会」とアズハル大学、インドネシア政府とマレーシア政府は、国際イスラーム会議や行事への招待、留学生の受け入れなどで、日本人ムスリムに勇気を与えてくれたのであります。

この時代のその他の動向としては、1961年に在日外国人ムスリム留学生を中心とした「ムスリム学生協会」が組織されたことがあります。彼等は生まれながらのイスラームの知識と語学力で布教活動を活発にしました。

また日本のアラビア語の普及に貢献し、イスラームの布教にも熱心であった、ハッサン・エル・サムニー教授（エジプト）は多くの日本人に知遇を得、布教活動の力となりました。

そして、もう一つは、1963年に「日本イスラーム協会」が、学術団体として新発足したことです。それによって日本のイスラーム界は、宗教団体としての「日本ムスリム協会」と学術団体としての「日本イスラーム協会」との両輪で担われることになりました。

「日本ムスリム協会」の活動は、「ムスリム学生協会」と、いわば二人三脚の協力関係によって推進されましたが、その主な活動には次のものがあり、これらの活動は現在も引継がれ継続しております。

- (1) 1959年にファルーク永瀬の編集した機関紙「イスラームの声」は現在も会報誌「イスラーム」として形と内容を変えて発行されています。
- (2) オマル三田の聖クルアーン（日亜対訳）の翻訳（タフシール）は、三田氏の、「ムスリムの訳したクルアーンが必要だ」との一念で、1959年に開始されました。三田氏は、1963年に70歳の高齢を押して、聖地マッカに飛び、パキスタンのハーフィズ、アブドルラシド・エルシャド師と再会を果し、師の指導と、世界イスラーム連盟の財政的支援によって、2年をかけて翻訳作業を終了しました。しかし完成までには、約10年の歳月を費やしたのであります。現在も当協会としてはその精神を引継ぎ、増刷を続けておりますが、その都度訳文に検討を加えながら、現在第6刷まで発行しております。
- (3) 留学生の派遣は、初代今泉会長と、三代斉藤会長の人材養成のための悲願でした。幸い

にも当時エジプトのアル・アズハル大学は、日本の若いムスリムに大きな門戸を開放し、1958年2人、1962年8人、1965年6人の計16人のムスリム学生を留学生として招待しました。

現在の協会活動はこれら留学経験者の人達を中心となって運営されております。その後も留学生派遣は協会の主要課題として位置づけられ、世代毎にこれまで約70人の学生をサウディアラビア、エジプト、シリア、リビア、ガルフ諸国、マレーシア等に派遣しております。

- (4) イスラーム霊園用地の確保は大きな課題でした。なぜなら、ご存知のようにイスラームは火葬を禁じているからです。1964年、山梨県塩山市に10,800㎡(2,700坪)の土地を購入し、ムスリムの霊園としてこれまで埋葬を行ってきました。現在約80体の内外ムスリムがここに眠っておりますが、今後のムスリムの増加に対応すべく、昨年はさらに100体の埋葬が可能なスペースを造成しております。

#### 4. 「石油危機」と第二次イスラーム・ブーム

1970年代の「石油危機」には日本人の産油国、イスラーム諸国に対する関心が一気に高まり、国も企業も熱い視線を中東産油国に向け、当協会のアラビア語講座はどのクラスも満員でした。

布教活動は1974年にイスラミックセンター・ジャパンが東京に開設され、一層の拍車がかかりました。メンバーは、かつての「ムスリム学生協会」の人達であった。サーリハ・サマライ(サウディアラビア)、アブドルラハマン・シディキ(パキスタン)、オマル・ムーサー(スーダン)、アブドルバーセット・セバイ(エジプト)、他外国人ムスリムで、これに日本人ムスリムでは、日本ムスリム協会会長を退いたアブドルカリーム斉藤、アブドルムニール渡辺、他ムスタファー小村、ハーリド木場が参画しました。

情報誌「アッサラーム」や、日本語の解説書を発行し、又シンポジウムや学会を開催し、日本におけるイスラームの布教活動を積極的に展開しました。

「日本ムスリム協会」でも、留学から帰国した若い会員を中心に、個有の活動を展開しました。

その一つは、オマル三田訳『聖クルアーン』の改訂版の発行であります。アブドッサラーム有見をリーダーとして、日本語訳に検討を加え、読者の利便性を考え、現在の縮刷判にしたのもこの時であります。

その二としては、「日本サウディアラビア協会」の出版事業に対し、全面的に協力することでした。イスラームの関心の高まる時代背景にあって、イスラームを紹介する書籍の出版は急務でありました。協会としてはエジプトやサウディアラビアの留学から帰国し、教職についていた会員を、著作や翻訳に総動員しました。すなわちハディース、『サヒーフ・ムスリム』(3巻)にはラマダーン磯崎、ユーセフ飯森、モフセン小笠原。『正統四カリフ伝』(上・下2巻)にはヌールッディーン森、ユーセフ柏原。『預言者伝』にはハサン中田。『預言者の妻たち』にはファーティマ徳増の各会員であります。

## 5. イスラームの新しい動きと期待

近年になって、国際社会におけるイスラーム諸国の地位の向上や、日本経済の発展と円高現象は、日本とイスラーム諸国の人的交流を急速に促進しました。例えば日本企業のイスラーム諸国への進出や、一般人の海外旅行の拡大は、日本人にイスラーム世界を直接見聞する機会を与えることになりました。

一方イスラーム諸国からも留学生や企業研修生の来日や、労働者の移住が活発化し、現在では約10万人の外国人ムスリムと4,000～5,000人の日本人ムスリムが首都圏を中心に、日本全国に居住して日本社会を構成しています。今やイスラームは日本人にとって身近な存在となっています。

特記すべきことは、昨年再建された東京ジャーミー（モスク）は、一般日本人の関心も高く、毎月平均1,000人の参観者があります。

現在、日本における主要なイスラームグループは、日本ムスリム協会、東京ジャーミー、イスラミックセンター・ジャパン、イスラミックサークル・オブ・ジャパン（浅草モスク）、大塚マスジド、一ノ割モスク、海老名モスク、八王子モスク（関東圏）、名古屋モスク、京都イスラーム協会、大阪ムスリム協会、神戸モスク等があり、金曜日の合同礼拝のために、各地域のグループがそれぞれ自分たちの礼拝所を運営しており、現在ビルディングを改装してモスク風にしたものや、ビルの一室を賃借したものを合わせると、全国で約60カ所になります。これには日本経済がバブルで崩壊し、地価や不動産物件の値段が下がり、手頃な値段で購入できるようになった時代的背景があります。

30年前の1969年の協会誌にこんな記事のあるのをご紹介します。

「現在日本におけるイスラームの教勢はまだ微々たるもので、日本人ムスリムは約2,000人、外国人ムスリムは約1,500人、又イスラームの団体は当協会を含め4団体であります」と。

## 6. 宗教協力と日本ムスリム協会の立場

現在地球上では、宗教と民族の違いによる紛争が多発しています。世界の宗教界は、10数年前から、各宗教や宗派の指導者が集まり、対話を通して問題を解決すべく、国際平和会議や平和の祈りを開催しています。日本の宗教界も積極的に参加しており、日本で開催する場合には、当協会は、世界のムスリム10億人の、日本における窓口として、イスラーム世界の権威者を、日本の宗教界に紹介する重要な役目を担っております。最近の例では、

1994年（伊勢大会）：国際イスラーム思想文明研究所教授、ワン・ダーウッド博士  
（マレーシア）

1995年（東京大会）：モハンマディーヤ会長、アミン・ライース博士  
（インドネシア） 現在国民協議会議長

1997年（京都、比叡山）：アズハル大学学長、アハマド・ハーシム師（エジプト）

アズハル大学通訳学部部長、ムハンマド・アボーレイラ教授  
(エジプト)

世界イスラーム連盟総長、アル・オバイド博士  
(サウジアラビア)

イスラーム最高指導者、アハマド・クフタロー師 (シリヤ)

があげられます。

## 7. 今後の課題として

最近の新しいイスラーム家庭には二世の誕生が見られ、その反面では高齢化現象が現実的進んでおります。子供達には健全なイスラームの宗教教育が必要であり、又、親や老人のためには、介護施設や霊園（埋葬地）の確保が重要課題として提起されます。今後イスラームが日本社会に定着し発展するためには、ムスリム一人一人がその生活する地域社会において対等の立場に立ち、住民や他宗教の人達と健全な対話を通して共生していく努力が問われるであります。その意味において、私達は、イスラーム国家として発展するアラブ諸国やアジア諸国の人々と共にアッラーが示された正しい道を歩むべく奮闘努力する必要があるのであります。

このスピーチを終るに当り、皆様に一言ご報告申しあげたいと思います。

それは私達協会会員の長年の願望でありました、礼拝所を兼備した協会事務所の購入が2年前、代々木に実現したことであります。物件の購入計画に対し、サウディアラビア王国皇太子兼第一副首相、アブドゥラー・ビン・アブドル・アジーズ殿下は、協会の地道な活動に深い理解を示され、資金援助を賜われたのであります。また、在日サウディアラビア大使、ムハンマド・バシール・クルディ閣下には、協会活動について、常に適切な助言と協力をいただいていることを申し添えたいと思います。

最後にこの機会を与えてくださった主催者の学院長、アブドゥラー博士並びにイマームのサード師他関係者に敬意を表すると同時に、この小論が日本におけるイスラームの理解と発展に少しでも貢献できるよう、アッラーの導きを祈るものであります。

## 参考資料

日本の宗教別学校数（1993）

	大学・短大	高校	中学	小学校	合計
キリスト教系	144	218	174	85	621
仏教系	75	117	46	10	248
神道系	4	5	3	0	12
新宗教系	4	18	14	4	40

(国学院大学、日本文化研究所、井上順孝教授のレジュメより)